

氏 名（本 籍）	<small>なかむら</small> 中村 <small>じゅん</small> 純 （ 岡山県 ）
学 位 の 種 類	博士（医学）
学位授与番号	甲 第 733 号
学位授与日付	令和 6 年 3 月 14 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	Subjective factors affecting prognosis of 469 patients with esophageal squamous cell carcinoma: a retrospective cohort study of endoscopic screening
審 査 委 員	教授 森谷 卓也 教授 勝山 博信 教授 戸田 雄一郎

論文の内容の要旨・論文審査の結果の報告

食道の扁平上皮癌（ESCC）は早期発見が難しく、進行も早く、ステージが進んだ症例では予後不良である。内視鏡などにより早期に発見し、早期治療を行うことが望まれるが、本邦の症例における予後因子、特に自覚症状の有無に関して詳細に検討した研究は乏しい。そこで、ESCC の予後に影響を与える臨床的要因を検討すること、さらに自覚症状が予後にどのように影響を与えているか、調査を行った。川崎医科大学総合医療センターと附属病院において消化器内視鏡検査を受け、病理組織学的に ESCC と診断され 496 例について、カルテ調査をもとに後方視的に検討した。また、自覚症状があつて受診した群（症状群）とそれ以外の群（非症状群）の 2 群間でも比較を行った。臨床病理学的な評価項目として年齢、性別、BMI、飲酒歴、喫煙歴、内視鏡検査目的、基礎疾患、腫瘍の部位、腫瘍サイズ、分化度、形態、病期、治療内容、観察期間を調査し予後と比較した。その結果、男性、ステージ III 以上、自覚症状ありの患者では有意に予後不良であることが明らかになった。症状群と非症状群との比較では、年齢、性別、飲酒歴、喫煙歴などの背景因子には差がなかったが、症状群では有意に病変のサイズが大きく、病期も III 以上が多く、内視鏡治療の割合が低かった。さらに、症状の中では特に嚥下に関連するものが重要と思われた。本研究では、有症状、嚥下関連症状の存在が症状の進行を意味していることを初めて明らかにした。従って、ESCC においては、自覚症状に応じた内視鏡検査の実施は有効ではないことも判明した。今後は ESCC の高リスク集団を抽出して内視鏡スクリーニングプログラムを実施することが、ESCC の早期発見と死亡率の低下に寄与するものと思われた。

学位審査会（最終試験）の結果の要旨

学位審査会においては、学位申請者からパワーポイントを用いて、学位論文の背景、研究の目的、方法、結果ならびにその科学的解釈について 15 分間の説明がなされた。学位審査委員からは、本研究における症例選択方法の再確認、主論文の各図表の意義に関する確認、ESCC のリスクが存在する人に対してスクリーニングを行うことの意義と実行性、症状群と非症状群の両群に属してない 70 例の非解析群を設けた理由とその詳細、検討に用いた予後の調査方法とその解析に関する考え方、治療方法に対する解析の必要性和本研究

における実情、海外における食道癌の組織型分布と本邦症例との差異、さらには中間発表の際に指摘がなされた点（新たなバイオマーカー創出の可能性、および三大リスク因子を有し ESCC が未発症のコントロール群を利用した ESCC 群との対比の可能性）に関しても十分な質疑が行われた。申請者本人は、それらの質問・意見の意味をよく理解し、すでに明らかにされている研究背景、本研究で新たに明らかになったことと、未解明で今後の課題とすべきことに分けて、適切に応答、議論を行うことができた。審査会を通じて、本研究は申請者本人が主体となり遂行したものであること、その内容を的確に伝える能力と技能を有していること、今後さらに研究を発展させ、独立して研究を遂行する能力を有していること、さらに学問に対する真摯な態度を持ち合わせていることが確認できた。以上、本研究は学術的重要性、研究手法の妥当性と応用性、結果の分析と考察内容ともに、学位授与に値するものであると評価できた。発表能力、質疑応答能力、研究遂行能力いずれも十分に有しており、審査委員全員による合議の結果、本申請者の学位審査は合格と判定した。